

3. 大和時代

大和地方（今の奈良県）に、豪族たちが連合して、大和という国と大和朝廷とよばれる政府をつくりました。

この政府が大和地方におかれていた時代を、大和時代といいます。

大和朝廷は、5世紀ごろには、九州から関東地方までの豪族を従えるようになりました。大和の豪族たちの中心になっていたのが大王（今の天皇）です。豪族たちが競って大きな古墳を造ったのも、この時代です。

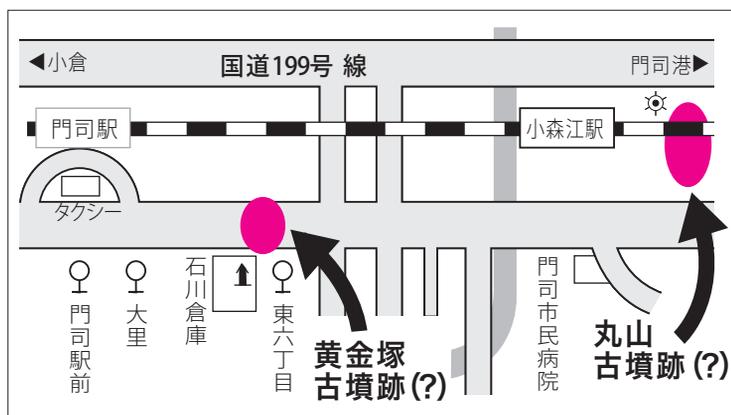
今の奈良県大和地方にできた大和朝廷の下で、門司の地は、「豊国の聞」の一部から「豊前国の聞郡」の一部へと変わりました。

この時代、門司にも豪族がいて古墳を残しました。また、九州（当時は「筑紫」が呼び名。後に西海道）の主要な道路の起点とされ、今の門司港駅のような、交通や物資の輸送を仕事とする役所「社（杜）埜関（後の門司関）」が置かれました。

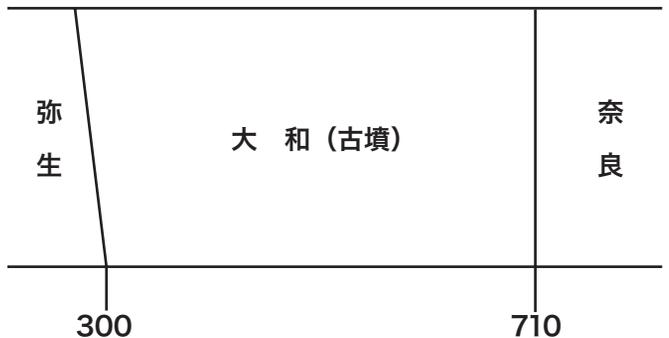
(1) 大里の大川河口一帯と猿喰の船泊まりに古墳を造らせた門司の豪族たち

○ 門司にもあった古墳群

土壙墓の次に門司に現れたのが、円墳墓です。猿喰地区と大里東口の大川河口一帯が、門司の古墳地帯でした（平成の今となっては、場所が不明）。



黄金塚古墳跡と丸山古墳跡と思われる場所



黄金塚古墳の「碑」(石川(株) 第一倉庫)

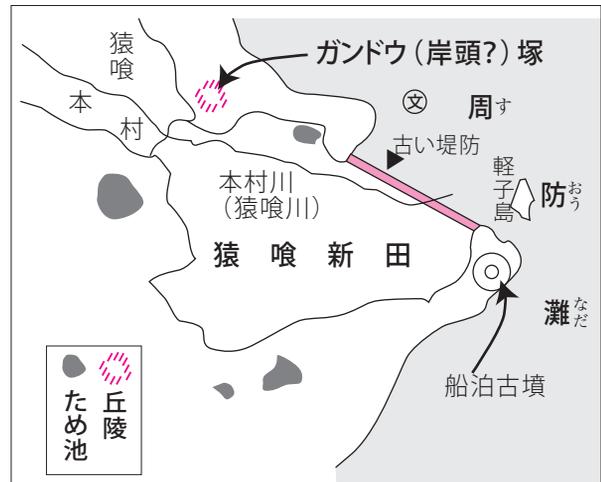
○ 猿喰地区の古墳

猿喰新田のその前の姿は、2つの岬をもつ湾でした。そして、軽子島側の岬の丘陵の頂上に「船泊古墳」がありました。この古墳は、明治のころに壊されてしまい、出土品の有無、古墳の形、内部の様子など、一切が分からなくなっています。

また、湾と本村との間の浜を「波寄」といっていました。そのほぼ右手にある小丘をガンドウ（岸頭？）と地の人は名付けています。その頂上に直径が1 m 50 cmほどの円墳が2基あります。長い年月で、盛土の下に敷きつめられていた丸っこい小石が散在しています。地の人は、「ガンドウ塚」といいますが、それがいつの時代のものかも、塚の名の由来も不明です。



猿喰・大里東口の位置



当時の猿喰地区の様子

○ 大川の河口付近

協和醸酵工場前の国道199号線とJRの線路の間あたりと、関門製糖工場敷地から西鉄「東町六丁目」バス停あたりまでの一帯が古墳地帯でした。

● 黄金塚古墳（円墳）

1910（明治43）年、今のバス通り（国道3号線）の拡張工事の時に、道筋の小丘を切り崩していると、石組みが現れ、人骨と鉄刀と中国の古銭が出土しました。

人骨の主は、この一帯を治めていた豪族だったのです。「黄金塚の碑」の岩石は、当時の石組みの一部です。

● 関門製糖工場敷地内石棺墓群

明治の初めごろ、畑の開墾中に石棺（箱式石棺か？）が数基出土したということ以外、伝承がありません。直径が4～5 mの小形の円墳だったと思われます。

●小森江丸山古墳（円墳）

小森江駅の門司港よりの線路あたりに、地の人たちが「丸山」とよんだ小丘がありました。1916（大正5）年、その丸山を取り崩す工事をしているとき、漢式鏡が出土し、それが円墳だったことが分かりました。



小森江丸山古墳出土の漢式鏡（東京国立博物館蔵）

○ 豪族（むらの首長・指導者）の墓が丘の上や海岸近くに造られたわけは・・・

豪族には、自分の家族や縁者、そしてむら人の生命と財産とくらしを守る役割が強く求められていたと思われます。また、自分自身には、威厳（プライド）と力を誇りたい・知らせたいという願いも気持ちも強く持っていたに違いありません。

関門海峡に大川が河口を開く一帯や、周防灘に岬を突き出している猿喰の船泊の地は、沖を往来する船頭や旅人に見えやすいところです。しかも、むらを一望でき、逆にむら人からも常に見える場所です。

(2) 大和朝廷の門司進出

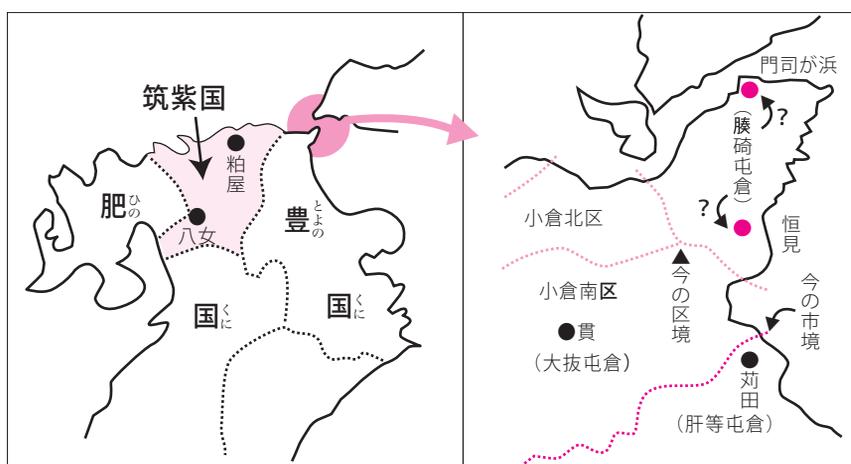
○ 藤原氏の設置

● 磐井の乱がつくったきっかけ

527（継体天皇21。男大迹が継体天皇となって21年め）年、朝鮮半島の新羅へ出兵する大和朝廷の軍に、筑紫国の八女（福岡県八女市）の大豪族「磐井」が戦いを挑みました。

翌年、磐井は敗れ、息子の葛子は、糟屋の地を朝廷に献上して、死をまぬがれました。

朝廷は、そこを私有地（屯倉）としました。磐井の敗戦が、大和の勢力を九州（筑紫島）に誘い込む結果となったのです。



筑紫国と藤原氏の設置

● 門司に屯倉がつくられ、大和朝廷の進出が進む

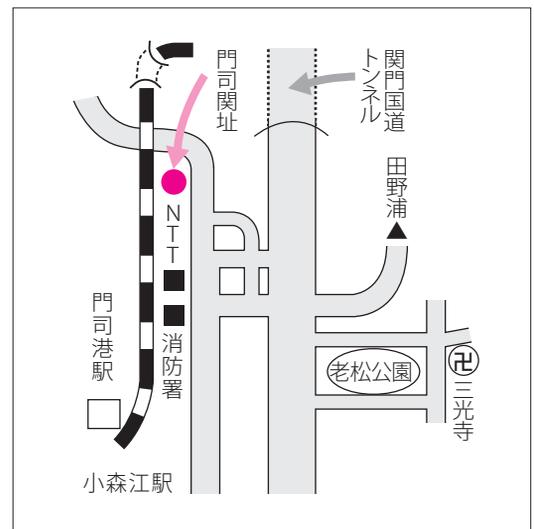
次の安閑天皇の大和朝廷は、535（安閑天皇2）年に、九州の玄関口の門司と周辺の地に屯倉を置きました。こうして、九州の地は大和勢力の下に組み込まれました。「日本書紀」の記述の一部を示しましょう（原文は句読点のない漢文です）。

二年……五月……置……豊国^{とよくに}關^か碕^と屯倉、……肝等^{かとうてん}の屯倉、大抜屯倉……
 ☒読み方～二年五月。豊国に關碕の屯倉、肝等の屯倉、大抜の屯倉を置く

☒ 門司関の設置



門司関の碑



門司関へのアクセス

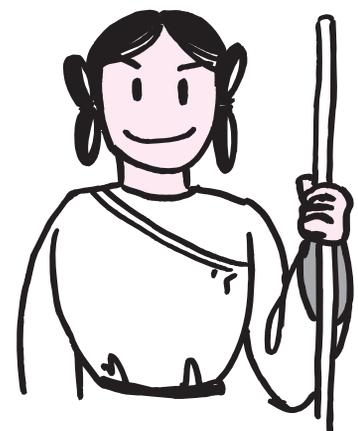
646(大化2)年、「大化の改新の詔^{みことり}」が出され、門司に関所、到津（小倉北区）に宿駅を設置することになりました。「日本書紀」と「延喜式」で記述の一部を見ましょう。

三年春正月……其二日……置……関塞
 ●読み方～其の二は曰う。関塞^{せきさい}〈関^{うまや}と駅〉を置け

豊前国 社碕 到津各十五匹……

関所名は「社^{もり}（杜）碕関」だったのでしょ。ちなみに宿駅と馬は、役人しか利用できませんでした。

関所は、旅人（役人）がもつ許可証^{しょうに}や荷を調べる役所でした。



(3) 門司を詠んだ有名無名の万葉歌人たち

○ 万葉集とは・・・

大和時代の初めごろから奈良時代の759
(天平宝字3)年ごろまでの天皇・貴族・
庶民が詠んだ約4500首の歌集です。

歌を記した文字は「漢字」で、「万葉仮名」と呼ばれています。漢字を“ひらがな”読みしているのが大半だからです。

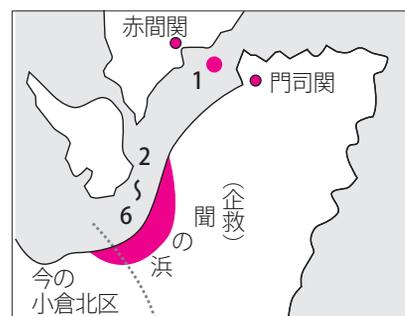


門司の万葉歌人たちが詠んだ浜辺は今・・・

○ 門司を詠んだ、大和時代の有名無名の歌人たち

約4500首の中に大里の浜辺（聞の浜辺）などを詠んだ歌が6首あります。2首は、有名な柿本人麻呂（大和時代の人）と大伴旅人（奈良時代の人）の作です。4首は、地元の庶民の作です。

1. 柿本人麻呂が所用で太宰府へ行く途中、海峡を渡るときに詠んだ歌



関の浜の位置

おおきみの 遠之朝廷跡 蟻通 嶋門乎見者 神代之所思

(大君の 遠の朝廷と ありかよう 嶋門を見れば 神代し思ほゆ)

- 意味→大和朝廷の九州の役所である太宰府に通じる門司関と赤間関、その間の海峡を往来する人と船の何と多いことか。そのにぎわいぶりを目にすると、昔のことがしのばれてくることよ。

※ 人麻呂は、おそらく「神功皇后と穴門の伝説」を“所思”したのでしょう。

2. 門司大和人が聞（企救）の浜辺を舞台にして詠んだ歌

豊国之 聞之浜辺之 愛子地 真直之有者 何如将嘆

☑豊国の 聞の浜辺の 愛子土 真直しあれば 何か嘆かむ

愛子地→角のとれた砂の浜

真直→素直な心

豊国能 聞之高浜 高々爾 君待夜等者 左夜深来

☑豊国の 聞の高浜 高々に 君待つ夜らは さ夜更けにけり

高々爾→足の爪先を立てて

背を高くする動作